

吉野作造通信

第 27 号

発行
『吉野作造通信』
を発行する会

男子普通選挙一〇〇年

吉野作造——人と学問（十五）

動く記念館、育つデモクラシー

——戦後八〇年、男子普選一〇〇年の現在地

慶應義塾大学教授 清水唯一朗

はじめに

二〇二五（令和七）年は昭和一〇〇年、戦後八〇年という節目の年であった。八月十五日を中心に各方面で回顧や検証を行い、未来に進もうとする取り組みが多くみられた。

それだけではない。一九二五（大正十四）年に加藤高明を首班とするいわゆる護憲三派内閣が男子普通選挙制度を制定してから一〇〇年という年でもある。日本の民主主義にとって記念すべき年といえよう。

奇しくも、それは吉野作造記念館の開館三

〇年とも重なった。同館が男子普選七〇年を記念して開設されたわけではなく、重なりは偶然である。この偶然をどう生かすかは、現在を生きる私たちに託された課題であった。

以下、記念館の取り組みを取り上げつつ、この一年、昭和を、戦後を、民主主義を、私たちがどう捉え、生かすことができたのかをあらためて考えていきたい。

一、見せて、伝える

——男子普通選挙一〇〇年

全国各地で昭和一〇〇年、戦後八〇年、男

子普選一〇〇年を記念する企画やイベントが開かれるなか、記念館では「大崎からみる普選元年」が企画された。吉野はもとより、その周辺にあった内ヶ崎作三郎、官僚出身の守屋栄夫、ベテラン政治家の菅原伝、吉野家の婿である赤松克麿などから多角的に地域と政治、選挙のありようを浮かび上がらせた。

くわえて、その際には実現しなかった完全普選、すなわち婦人参政権（婦選）についても吉野の活動を軸に解説し、青年の政治教育にも相当なスペースが割かれた。このことは、近年の記念館の活動ともリンクし、その広がりを感じさせるものであった。

これだけ充実した展示が可能となったのは、記念館が資料館としての基本的な機能を備えることに注力してきたためである。大川真事務長（のちに館長。現在、中央大学）が指揮を執って所蔵品を総点検し、目録を整備した

1 具体例として、アジア歴史資料センターのオンライン展示「普選」への道」を挙げておきたい。 <https://www.jacar.go.jp/universalsuffrage/>。また、NHK「歴史探偵」では「日本人と選挙」と題した企画が生まれ、筆者のほか、村井良太先生（駒沢大学）など記念館関係者も参画した。こちらは現在もNHKオンデマンドで視聴できる。 <https://www.nhk-ondemand.jp/goods/G2025150234SA000/>

ことで、その時々々の要請に合わせた能動的な展示が可能となった。

それは館内に止まらず、全国的に吉野の業績と思想を知らしめることにも役立った。目録が公開されたことで、他の施設が吉野の資料を借り出して紹介することが可能になったからである。こうして結ばれたネットワークは、翻って記念館の充実に貢献している。

二、聞いて、考える

——人材育成研修会

私自身は二〇〇七年から記念館にかかわる機会をいただいた。館の運営を引き受けられたNPO法人吉野学人のみなさんが、新機軸として提案された人材育成が契機だった。

いや、正しくは吉野作造賞の授賞式にいらしたみなさんが、受賞者の猪木武徳先生（当時、国際日本文化研究センター）に運営への協力を依頼した。それに対して猪木先生が提示されたのが、未来への投資、すなわち人材育成であった。

猪木先生は、同賞の受賞者である阿川尚之先生（当時、慶應義塾大学）、御厨貴先生（同、東京大学）にも声をかけられ、計画が始まった。先生方が共通してご存じで人材育成に興味のあった私が実働部隊として入り、日本政

治思想史を専門とする苅部直先生（東京大学）にも初回からご参加いただいた。

研修会は先生方の講演を中心としつつ、参加する学生が大量の文献を読み、自ら考えるかたちを取った。単なる学習会ではなく、参加者が自らのデモクラシーを考え、動くきっかけにできることに重点を置いた。

今日も同様であるが、最大の課題は予算だった。教員を全てボランティア参加とすることはみなさんが了解してくださったが、学生の参加費は検討が必要だった。無料にするのは筋違いだが、古川までの交通費、宿泊費が全て自弁となると、裕福な学生しか来られない。デモクラシーを考える場にとって、それは大きな制約であり、損失となる。

英断は専務理事であった佐藤俊明さんが下され、参加費を極限まで抑えていただいた。無理を押し、未来の人材のために尽力してくださることに心から感謝申し上げたい。

研修会は晩夏の古川で行われる恒例行事となった。初日の公開講演を記念館で行ったのち、コロナアルスタイルの中新田の交流センターでゆつくりと議論する時間は、学生はもちろん、私たちにも大切なものとなった。

参加者は東京（東京大学、慶應義塾大学、駒澤大学、中央大学、立教大学）、京都（京都

大学、同志社大学、龍谷大学）だけでなく、地元・東北大学の学生を迎えることによく留意し、苅部先生が東北大学の日本思想史研究室にお声がけくださった。現在は、同大の国際文化研究科で学ぶ留学生や、新潟（新潟大学）、さらには古川の高校生も参加するなど、大きな広がりを見せている。

本年（二〇二五年）の研修会に話を進めよう。男子普選一〇〇年にあたり、どのような切り口とするのがよいか、前年の研修会の中から参加講師のあいだで議論が進んだ。

中高の日本史の授業では、一九二五年の普選選挙は治安維持法とセットで論じられる。同法には戦時の言論弾圧を象徴する「稀代の悪法」のイメージがつきまとうが、学会ではその理解はすでに否定されている。「悪法」とされるのは一九二八年の改正による改悪部分であり、男子普選とあわせて公布された際にはそうした性格はなかった。それを明らかにした中澤俊輔さん（秋田大学）に今回、初日の基調講演をお願いした。善悪二分論に帰さない実証的な議論は好評を博した。

二日目の研究会パートでは、男子普選制定までの政治過程を丹念に追った奈良岡聰智さん（京都大学）と、実施後の議論を福田徳三を軸に論じた武藤秀太郎さん（新潟大学）が

担った。同時代の議論が具体的に示されたことで学生の質疑、ディスカッションは例年以上に盛り上がり、深みを見せた。

議論は宿舎に戻ってから続いた。全体のコーディネートを担当してくださる主任学芸員の小島翔さんの発案により、講義のあいだや宿舎での時間にも学生間の議論の時間が存分に取られた。宿舎となった青葉荘さんは快適な環境と絶品の食事を提供していただいている。お礼申し上げたい。

その結果、三日目の最終成果報告会は、二日間の講義をなぞるものではなく、そこから得られたそれぞれのデモクラシーを報告する機会となった。学びの本質は知識を得るだけでなく、それを自分のことばにし、内省と実践を繰り返すことにある。それを改めて感じさせてくれる時間となった。

まもなく二十年を迎えるこの研修会からは、実に多彩な人材が生まれている。研究者（前述の大川さん、小嶋さんも本研修会の出身者である）、中央・地方の公共部門はもちろん、企業で、社会で、地域で、国内で、世界で、自らが当事者として作るデモクラシーを実践している。予算上も、業務上も、かなりの負担がありながら続けてくださる記念館あつてのことである。感謝申し上げます。

三、動き、育てる

—デモクラシーフェスティバル

人材育成研修会からの縁で事務長、館長となった大川さん、それを継がれた氏家仁さんのもと、記念館ではより広い世代に向けたシチズンシップの涵養、デモクラシーの普及が図られている。

高校生デモクラシー塾では、地元の高校生による十八歳選挙権キャンペーンや、地域課題への政策提言へのサポートが継続されている。静的で顕彰にとどまる施設ではなく、動的で課題に向き合っていく、デモクラシーの場として記念館は機能している。

社会貢献に取り組む青年への支援も積極的に行われている。吉野作造フェローシップはその代表例であろう。「大崎高校生ミライゼミ」を主宰し、初回の助成対象者となった川向さんは、現在、世界を舞台に若者の実践を後押しする活動を展開している。芽が育っていることを実感する。

そうしたなかでも、本年（二〇二五年）二月に行われたおおさきデモクラシーフェスティバルには刮目させられた。地域交流センターの広い会場が来場者で溢れていた。

高校生による政策提言発表も満席のなか、

熱気を帯びて行われた。デモクラシー塾に代わって、地域の高校で行われている探究活動が磨き上げられていた。私も大川さんとともにコーディネートとして参加させていたが、研究者の視点だけでなく、地元の青年会議所のみなさんがコメントし、実践と支援に結び付ける仕組みが生まれていることに強い感銘を受けた。

学知と実践知が、高校生の活動を通じて結びついている。それが記念館を飛び出して行われていることに、開かれた記念館の現在を見た。この活動には、その後、理事長となった菅原美紀さん、理事の隆行さんの尽力があつたと承知している。心から敬意を表したい。

さらに若い世代に向けては、選挙の絵本『ケロッキープーとおおきなあな』と、それを用いた人形劇とによる展開がされている。子ども向けに選挙をしっかりと扱ったのは、かさとし「こどものとうひょう おとなのせんきょ」以来ではないだろうか。

この企画は同館の職員である本間明美さん、菅原暢子さん（作画も！）が取り組まれたといい、（公財）明るい選挙推進協会から優良活動表彰を受けるなど、高く評価されている。活動の射程は存分に広がっている。

おわりに

今の記念館の姿を吉野が見たら、なんといふだろうか。「おおきなあな」に登場する森の相談役・サクゾウさんは、動物たちの答えに「ミンポーン」という口癖で応じる。良いことの背中を押すことばだという。

記念館の取り組みを後押しすること、それも、長らく吉野の思想を伝えてきてくださった本通信と同様に、世の中を変える、私たちのデモクラシーの一步だろう。

(慶應義塾大学総合政策学部教授)

清水唯一朗氏 ご紹介

先生は慶應義塾大学総合政策学部教授。博士(法学)。専門は日本政治外交史、オーラルヒストリー。著書に『政党と官僚の近代』(藤原書店、二〇〇七年)、『近代日本の官僚』(中公新書、二〇一三年)、『日本政治史』(共著、有斐閣、二〇二〇年)、『The Origins of Modern Japanese Bureaucracy』(Bloomsbury 2019)、『原敬』(中公新書、二〇二二年)、『政務調査会と日本の政党政治』(共編著、吉田書店、二〇二四年)、『内務省』(共編著、講談社、二〇二五年)など。二〇〇七年度より吉野作造記念館人材育成研修会に講師としてかかわっておられます。九月二四日放送のNHK TV「歴史探偵―日本人と選挙」にご出演なさいました。